

切手と地質(2) アンモナイト

藤島泰隆

切手図案として採用されている化石(古生物)の中から、中生代(三疊紀・ジュラ紀・白亜紀)末期とともに絶滅したアンモナイトを紹介する。

アンモナイトは古生物学的には、

軟体動物門	頭足綱	アンモナイト亜綱	エアタイト目 (古生代 二疊紀末絶滅 247百万年前)
			セラタイト目 (中生代 三疊紀末絶滅 212百万年前)
			アンモナイト目 (中生代 白亜紀末絶滅 65百万年前)

という分類学上に位置づけられる。

頭足類はすべて海生で、世界中の海に棲み、貝殻が発達して体を保護している場合(アンモナイト類・オームガイ等)と、貝殻が完全に退化したものがある(イカ・タコ)。

現生の頭足類は2亜綱に分類され、

四鰓類(Tetrabranchiata)	現生では、オームガイ(Nutilus)の6種
二鰓類(Dibranchiata)	現生では、コウイカ・ヤリイカ・タコ等約730種

一方、地質時代の化石頭足類は1万種を超えている。

アンモナイト(Ammonite)は、その形状がエジプト・リビアにおける牡羊の頭をした神アンモン(Ammon または、Amen 太陽神)の角の巻きの部分に似ているところからつけられた(ウィーン美術史美術館蔵)。

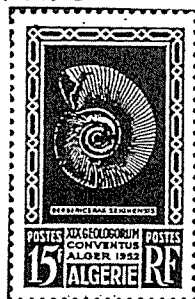
アンモナイトの殻の表面の模様が菊の花模様に似ているところから、日本では菊石または菊面石と呼称され、アンモナイトの化石が多産する地域を菊面石沢という地名を付けている。

アンモナイトが、地球上に現れたのは、古生代のデボン紀初期(3.8億年前)で、中生代に恐竜とともに全盛時代をつくり、白亜紀末期(6,500万年前)に絶滅した。

切手になったアンモナイトを発行順に紹介すると次のようである。

① アルジェリア

最初のアンモナイト切手は、第19回万国地質学会議を記念して発行した2種セット中の1枚である



発行日	1952.8.11
学名	Berbericeras sekikensis ROMAN
地質時代	ジュラ紀中期(Jurassic Bathnian)
化石の産出	アルジェリア・イリス・ドイ

② スイス

スイスは毎年慈善切手(付加金つき)を4~5種セットで発行しているが、その中に地質に関連した切手を多数(鉱物・化石等)含まれている

発行日 1958.5.31
 学名 *Orthosphinctes laufenensis*
 地質時代 ジュラ紀後期(Jurassic Oxfordian)
 化石の産出 ヨーロッパ・ケニア・アトリア・キューバ



③ キューバ

生物学者カルロス・ド・ラ・トーレ博士(1858~1950)の生誕100年記念として発行された4種セット中の1枚

発行日 1958.8.29
 学名 *Perisphinctes cf. caribbeanus* (JAWORSKI)
 地質時代 ジュラ紀後期(Jurassic Oxfordian)
 化石の産出 世界各々・日本



④ オランダ

国際博物館学会議の開催記念として付加金つきとして発行



発行日 1962.4.27
 学名 *Pleuroceras spinatum* (BRUGUIERE)
 地質時代 ジュラ紀前期(Jurassic plinsbachian)
 化石の産出 ヨーロッパ・北アフリカ

⑤ チェコスロバキア

第23回万国地質学会議記念として、5種セット中の1枚



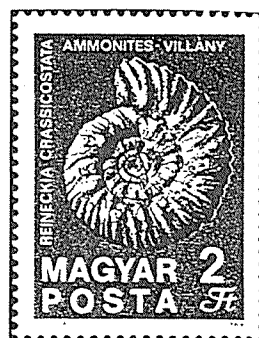
発行日 1968.8.8
 学名 *Hypophylloceras bizonatum*
 (FRITSCH)
 地質時代 白亜紀前期(Cretaceous Aptian)
 化石の産出 全世界

本会議は、プラハの春として民主化へ進むチェコを共産軍が進攻し、プラハにおける国際会議は、3日目で流会となった

⑥ ハンガリア

ハンガリア国立地質調査所創立100周年記念として、ハンガリア特産の化石と鉱物を描いた8種セット中の1枚

発行日 1969.11.21
学名 *Reineckeia crassicostata*
(切手上の学名に脱字)
地質時代 ジュラ紀中期(Jurassic Callovian)
化石の産出 アジアを除く世界各地



⑦ マダガスカル

マダガスカル産の稀石(紅玉髓, 黄方解石, 赤水晶等)として、4種セット中の1枚であり、アンモナイト化石は未固結の砂層の中から保存の良好なものが多産する

発行日 1970.4.28
学名 不明 (*Kossmaticeras* ?)
地質時代 白亜紀中期以降
化石の産出 世界各地

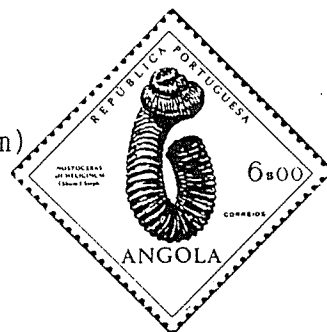


化石の表面が装身具として、研磨されているために、化石の同定は難しいが、形状から想定

⑧ アンゴラ

アンゴラ産の鉱物と化石を12種セットした中の1枚(菱形切手)で異常巻アンモナイトの1種

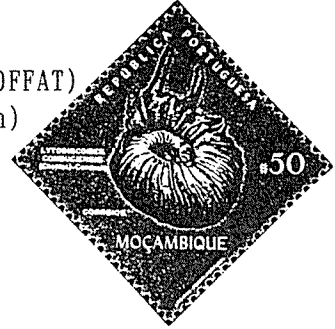
発行日 1970.10.31
学名 *Nostoceras helicinum* (SHUM.)
地質時代 白亜紀後期(Cretaceous Campanian)
化石の産地 アンゴラ・イリス・マダガスカル・アメリカ



⑨ モザンビーク

モザンビーク産の化石と鉱物を9種セットにした中の1枚(菱形切手)

発行日 1971.1.15
学名 *Lytodiscoides conduciensis* (CHOFFAT)
地質時代 白亜紀中期(Cretaceous Turronian)
化石の産地 モザンビーク



⑩ オーストリア

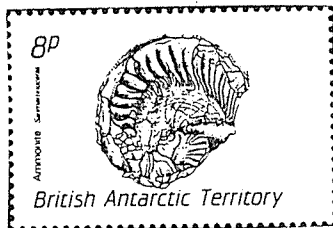
女帝マリア・テレジアの夫フランツ・ロートリンゲンの大コレクションを基礎としたウィーン自然史博物館100年記念として、アンモナイトを描く



発行日 1976.4.30
学名 *Virgatosphinctes transitorius* OPPEL
地質時代 ジュラ紀後期(Jurassic Tithonian)
化石の産出 東アジアを除く世界各国

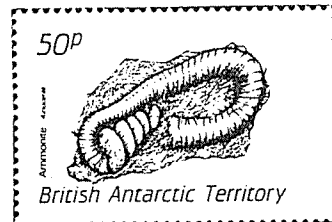
⑪ イギリス領南極地方

南極地域で産出した化石の中から、15種セットで発行した中に3種のアンモナイトがある



発行日 1990.4.2
学名 *Sanmartinoceras* sp.
保存が極めて悪い
地質時代 白亜紀中期(Cretaceous Aptian)
化石の産地 ヨーロッパ・オーストラリア・南ジョージ島

発行日 1990.4.2
学名 *Ainoceras* sp.
異状巻の1種で日本からも多産
地質時代 白亜紀
化石の産出 世界各



発行日 1990.4.2
 学名 *Gunnarites antracticus* (WELLER)
 地質時代 白亜紀後期(Cretaceous Campanian)
 化石の産出 グラハム島



⑫ 日本

第29回万国地質学会議を記念して発行されたが、化石を正確に写実していないのが残念である

日本における化石としてのアンモナイト類は、北海道～九州まで、時代も古生代 デボン紀（3.8億年前）から中生代 白亜紀末期（6,500万年前）まで、種類・量とも豊富に産出している。特に、北海道の白亜紀層は世界中のアンモナイト学者が注目する化石の宝庫である。



発行日 1992.8.24
 学名 *Gaudryceras* (? 近似)
 地質時代 白亜紀後期(Cretaceous Turonian以降)
 化石の産出 世界

地質をテーマにした切手は、1970年代までは、1年に5～10種ほどで、世界各国から発行されたものも、150種程度で容易に収集できるテーマであったが、最近、地球の環境問題から、生物の絶滅が話題となり、世界各国から失われた生物として恐竜をテーマとした切手の発行が多く、化石の産出が想定されない国からも多数発行されるようになった。

(川崎地質株)

以上